武蔵野日曜聖書講筵　聖霊降臨節
聖霊のバプテスマ
――使徒行伝第２章――

１９５７年６月９日
小池辰雄

五旬節　バプテスマ　ヨルダン即ゴルゴタ　死生の転換　十字架の恩恵　旧き我とキリストにおける我　霊風火言　高次な霊言　能力ある業と不思議と徴　キリストの霊生　キリストのヨルダンの聖霊降臨　現象の奥の根源に連なる　名を呼ぶと一つになる　聖霊の賜物　愛の生命の霊　祈り

【使徒２】

1 五旬節の日となり、彼らみな一処（ひとところ）に集い居りしに、2 烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3 また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人（おのおの）のうえに止まる。4 彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣（の）べしむるままに異邦の言（ことば）にて語りはじむ。
5 時に敬虔（けいけん）なるユダヤ人ら天下の国々より来（きた）りてエルサレムに住み居りしが、6 この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語（くにことば）にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合い、7 かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、8 如何にして、我等おのおのの生まれし国の言をきくか、9 我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、10 フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人――ユダヤ人および改宗者――11 クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語（くにことば）にて彼らが神の大なる御業をかたるを聞かんとは』12 みな驚き、惑いて互に言う『これ何事ぞ』13 或者どもは嘲りて言う『かれらは甘き葡萄酒にて満たされたり』
14 ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣（の）べて言う『ユダヤの人々および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ、15 今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、16 これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。17「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女（むすこむすめ）は預言し、汝らの若者は幻影（まぼろし）を見、なんじらの老人は夢を見るべし。18 その世に至りて、わが僕・婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。19 われ上は天に不思議を、下

は地に徴を現さん、即ち血と火と煙の気とあるべし。20主の大なる顕著しき日のきたる前に、日は闇に月は血に変らん。21すべて主の御名を呼び頼む者は救われん』22イスラエルの人々よ、これらの言を聴け。ナザレのイエスは、汝らの知るごとく、神かれによりて汝らの中に行い給いし能力ある業と不思議と徴とをもて汝らに証し給える人なり。23この人は神の定め給いし御旨と、預じめ知り給う所とによりて付されしが、汝ら不法の人の手をもて釘磔にして殺せり。24然れど神は死の苦難を解きて之を甦えらせ給えり。彼は死に繋がれおるべき者ならざりしなり。25ダビデ彼につきて言う「われ常に我が前に主を見たり、我が動かされぬ為に我が右に在せばなり。26この故に我が心は楽しみ、我が舌は喜べり、且わが肉体もまた望みの中に宿らん。27汝わが霊魂を黄泉に棄て置かず、汝の聖者の朽ち果つることを許し給わざればなり。28汝は生命の道を我に示し給えり、御顔の前にて我に歓喜を満たし給わん」29兄弟たちよ、先祖ダビデに就きて、我ははばからず汝らに言うを得べし、彼は死にて葬られ、其の墓は今日に至るまで我らの中にあり。30即ち彼は預言者にして、己の身より出づる者をおのれの座位に坐せしむることを、誓いをもて神の約し給いしを知り、31先見して、キリストの復活に就きて語り、その黄泉に棄て置かれず、その肉体の朽ち果てぬことを言えるなり。32神はこのイエスを甦えらせ給えり、我らは皆その証人なり。33イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて汝らの見聞きする此のものを注ぎ給いしなり。34それダビデは天に昇りしことなし、然れど自ら言う『主わが主に言い給う、35我なんじの敵を汝の足台となすまでは我が右に坐せよ」と。36然ればイスラエルの全家は知るべきなり。汝らが十字架に釘けし此のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給えり』

37人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』38ペテロ答う『なんじら悔い改めて、おのおの罪の赦しを得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。39この約束は汝らと汝らの子らと凡ての遠き者、即ち主なる我らの神の召し給う者とに属くなり』40この他なお多くの言をもて証し、かつ勧めて『この曲れる代より救い出されよ』と言えり。41斯てペテロの言を聴き納れし者はバプテスマを受く。この日、弟子に加わりたる者、おおよそ三千人なり。42彼らは使徒たちの教えを受け、交際をなし、パンを擘き祈祷をなすことを只管つとむ。

43ここに人みな敬畏を生じ、多くの不思議と徴とは使徒たちに由りて行われたり。44信じたる者はみな偕に居りて諸般の物を共にし、45資産と所有とを

売り各人の用に従いて分け与え、46日々、心を一つにして弛(たゆ)みなく宮に居り、家にてパンをさき、歓喜と真心とをもて食事をなし、47神を讃美して一般の民に悦ばる。斯(かく)て主は救わるる者を日々かれらの中に加え給えり。

●五旬節

マタイ伝の一番終りを開きますと、

「16十一弟子たちガリラヤに往きて、イエスの命じ給いし山にのぼり、17遂に謁(まみ)えて拝せり。然れど疑う者もありき。18イエス進みきたり、彼らに語りて言いたもう

もちろん、復活のイエスです。

『我は天にても地にても一切の権を与えられたり。19然れば汝ら往きて、もろもろの国人(くにびと)を弟子となし、父と子と聖霊との名によりてバプテスマを施し、20わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教えよ。視よ、我は世の終りまで常に汝らと偕に在るなり』」（マタイ28・16～20）

「常に」という言葉は「全ての日を」という字です。

「これは使徒の時代になって後からマタイ伝に付加した節である」と学者は言う。それは、筆は後であるかも知れない。けれども、キリストがこの山において謁(まみ)え、何か言われたことは事実であると受けとらざるを得ません。

「父と子と聖霊との名によりてバプテスマを施し」

は、教会の言葉としてまことに形が整っています。

「視よ、我は世の終りまで全ての日を汝らと偕に在るなり」

この言葉は私はキリストが直接に語られた言葉だと思います。マルコ伝の終りを見ると、

「14其ののち十一弟子の食しおる時に、イエス現れて、己が甦えりたるを見し者どもの言を信ぜざりしにより、其の信仰なきと、其の心の頑固(かたくな)なるとを責め給う。15斯て彼らに言いたもう『全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣(の)べ伝えよ。16信じてバプテスマを受くる者は救わるべし、然れど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。17信ずる者には此等の徴、ともなわん。即ち我が名によりて悪鬼を逐いいだし、新しき言を語り、18蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん』」（マルコ16・14～18）

まとめてこれだけのことをキリストが言われたかは分かりません。これも学者は後から付け加えたと言う。けれども、学者が頭でこういうことが言えるわけではないので、その原型はもちろんあった。キリストは福音書の至る所においてこの現実を現しておられた。その内容を、言葉通りでなくても語られたことは、やはり私たちは受けとらざるを得ない。

ルカ伝の最後を見ますと、

「44また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言いし所なり』45ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、46『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、47且その名によりて罪の赦しを得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣べ伝えらるべしと。48汝らは此等のことの証人なり。49視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留まれ』（ルカ24・44～49）

これもやはり原型はキリストの語られたことだと私は受けとります。特に終りの、

「49視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留まれ」

というところ。そして、事実そのように、ルカ伝は使徒行伝と同じ記者が書いたものですから、使徒行伝の記者であるルカがその事を使徒行伝の第1章において、

「6弟子たち集れるとき問いて言う『主よ、イスラエルの国を回復し給うは此の時なるか』7イエス言いたもう『時また期は父のおのれの権威にうちに置き給えば、汝らの知るべきにあらず。8然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん』」（使徒1・6～8）

四十日の間、キリストは現れ、そして更に十日を経た。彼らは祈り待っていた。時に、いわゆる五旬節という日になって、

「1五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、2烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。4彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。

「異邦の言」はむしろ「異なる言」です。ペンテコステはもちろん「五旬節」という文字通りの意味ですが、これはレビ記23章に出ている。

「15汝ら安息日の翌日より即ち汝らが揺祭の束を携えきたりし日より数えて安息日をもてその数を盈すべし。16すなわち第七の安息日の翌日

「七×七」の四十九日です。即ち五十日目、

までに日数五十を数えおわり新素祭をエホバに献ぐべし。17また汝らの居所より十分の二をもてつくりたるパン二箇を携えきたりて揺べし是は麦粉にてつくり酵をいれて焼くべし是初穂をエホバにささぐる者なり。

そういう礼物の献げと、

18汝らまた当歳の全き羔羊七匹と少き牡牛一匹と牡山羊二匹を其パンとも

に献ぐべし

これは燔祭で、焼くんです。

すなわち是等をその素祭およびその澆祭とともにエホバにたてまつりて燔祭となすべし。是は火祭にしてエホバに馨しき香となる者なり。」（レビ23・15～18）

というのが五旬節の大義であるわけです。

この場合はそういうことではもちろんなかった。

1五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、

マッテヤが加わって十二弟子が一処に集って祈っていた。これは最後の晩餐の家であるかどうかは分かりませんが。そうしたらば、

2烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。

という、不思議な現象が起きてきた。

エゼキエル書第1章を見ると、エゼキエルが、

「**1第三十年四月の五日の我ケバル河の辺にてかの捕えうつされたる者の中におりしに天ひらけて我神の異象を見たり。……4我見しに視よ烈しき風大なる雲および燃ゆる火の團塊北より出できたる。又雲の周囲に輝光あり。その中よりして火の中より熱たる金族のごときもの出づ**」（エゼキエル1・1…4）

という異象を見ている。ここでも、「風」とあり、「火」とある。これがエゼキエルが霊視したところの霊的な現象です。

●バプテスマ

今日は「聖霊のバプテスマ」という題ですが、一体その「バプテスマ」というのはどういうものか。どの宗教でも「バプテスマ」「潔め」というような現象はある。日本でもある。新約聖書におけるバプテスマという事態は、当時の密義教の影響を受けたのだろうという学者もあるが、しかし、それは殆ど否定されていいのであって、やはりこれは旧約聖書から発している。

レビ記14章を見ると「潔め」の事が出ている。これは癩病人の潔めのことですが「潔礼」と書いてある。

「**1エホバ、モーセに告げて言いたまわく。2癩病人の潔められる日の定例は是のごとし。即ちその人を祭司の許に携えゆくべし。3まず祭司営より出ゆきて観、祭司もし癩病人の身にありし癩病の患処の痊たるを見ば、4祭司その潔められる者のために命じて生ける潔き鳥二羽に香柏と紅の線と牛膝草を**

取りきたらしめ、5祭司また命じてその鳥一羽を瓦の器の内にて活水の上に殺さしめ、6而してその生ける鳥を取り香柏と紅の線と牛膝草をも取て之をかの活水の上に殺したる鳥の血の中にその生ける鳥とともに濡し、7癩病より潔められんとする者にこれを七回灑ぎてこれを潔き者となし、その生ける鳥をば野に放つべし。8潔められる者はその衣服を濯い、その毛髪をことごとく剃りおとし、水に身を滌ぎて潔くなり、然る後に営に入りきたるべし。但し七日が間は自己の天幕の外に居るべし。」（レビ14・1～8）

「水に身を滌ぎて潔くなり」という、ここの所が即ち、旧約におけるバプテスマの一つの型です。既に旧約において、そういったバプテスマをやっていた。民数紀略19章17節にも、列王記略下5章11節にも出ている。もう少し霊的な意味で、その事態が受けとられてきているのが、有名な詩篇51篇です。

「7なんじヒソプをもて我をきよめたまえ。さらばわれ浄まらん。我をあらいたまえ。さらばわれ雪よりも白からん。8なんじ我によろこびと快楽とをきかせ、なんじが砕きし骨をよろこばせたまえ。9ねがわくは聖顔をわがすべての罪よりそむけ、わがすべての不義をけしたまえ。10ああ神よ、わがために清心をつくりわが衷になおき霊をあらたにおこしたまえ。11われを聖前より棄てたもうなかれ。汝のきよき霊をわれより取りたもうなかれ。12なんじの救いのよろこびを我にかえし、自由の霊をあたえて我をたもちたまえ。」（詩篇51・7～12）

イザヤ書1章にも、

「16なんじら己をあらい己をきよくし　わが眼前よりその悪業をさり悪をおこなうことを止め」（イザヤ1・16）

とある。預言者は、潔めの霊は同時に内的な霊的なこととして書いている。悪業をさり悪をおこなうことを止めなければ、いくら身を洗ったってどうにもならん、という角度です。

エレミヤ記2章にも、

「23たとい ソウダをもて自ら濯いまたおおくの灰汁を加うるも汝の悪はわが前に汚れたりと主エホバいい給う」（エレミヤ2・23）

とある。いくら、いわゆる外的な潔めをしても、心が潔められなければダメだと、預言者は潔めの事態を内的にとりはじめているわけです。

祭儀宗教が外的事態として潔めのことを一生懸命にやりますが、預言者は、

「もし外的潔めで事足れりとしているならそれは問題だ。内的な潔めというものが行われないで、どうして本当の潔めか」

というわけです。イザヤ書32章に、

「されど遂には霊うえより我等にそそぎて荒野はよき田となり、良田は林の

ごとく見ゆるとききたらん」（イザヤ32・15）

み霊によっての潔めの事態に預言者は既に入っている。聖霊降臨ということの先駆をなしているものはやはり預言者であった。例えば有名なイザヤ書42章に

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし」（イザヤ42・1）

とある。ヨエル書2章にも、

「12然れどエホバ言いたもう。今にても汝ら断食と哭泣と悲哀とをなし心をつくして我に帰れ。13汝ら衣を裂かずして心を裂き、汝等の神エホバに帰るべし。彼は恩恵あり憐憫ありかつ怒ることゆるく愛憐大にして災害をなすを悔いたもうなり」（ヨエル2・12～13）

「心を裂き汝等の神エホバに帰る」

という。「断食と哭泣と悲哀」もこの場合にはもはやただ外側のことでなくて、止むに止まれずして断食し、また止むに止まれずしてエホバに帰るということです。ここでは潔めのことは書いてないけれども、「心の潔め」ということを非常に強く警告している。悔改めというところに初めてみ霊が注がれるということです。

●ヨルダン即ゴルゴタ

そのことで一番著しいのは、何といってもキリストのバプテスマです。洗礼のヨハネが、

「8我は水にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖霊にてバプテスマを施さん。

と言った。キリストは聖霊でバプテスマを施す。

9その頃イエス、ガリラヤのナザレより来り、ヨルダンにてヨハネよりバプテスマを受け給う。10斯て水より上るおりしも、天さけゆき、御霊、鴿のごとく己に降るを見給う。11かつ天より声出づ『なんじは我が愛しむ子なり、我なんじを悦ぶ』（マルコ1・9～11）

本当のバプテスマをイエス・キリストは自ら受けられた。洗礼のヨハネによってキリストはバプテスマを受けられた。キリストは悔い改める必要のないひとでしたけれども――私たちが悔改めをしても本当の悔改めができない――この悔改めを彼自らが受けられた。この時にキリストの内外は全く一つであります。

「水の中に浸る」

ということと、彼が本当に

「自分を神の前にすっかり投げ出している」

ということが一つなんです。キリストが本当に己をすっかり神に明け渡し、投げ出した。これが「悔改め」ですから。自分というものを措いといて、

「あぁ、悪い事をした」

といって、その事を悔い改めるのは、悔改めではない。悔改めというのは、己そのものを神の前に投げ出す。自分自身を全く始末のつかないダメな者としてはっきり自覚して、自分を完全に神に明け渡す。これがキリストのバプテスマの受け方であった。全我をすっかり投じてしまって、投入してしまって、神さまに全托してしまう。己をすっかり否定してしまう。即ち、己に完全に死ぬことです。

これはもう、ゴルゴタの十字架に通じている。ヨルダンの河の底はゴルゴタの丘の上の十字架に通じている。彼が完全に自分を投げ出した、その極みの姿はキリストの十字架です。

十字架の後には彼の全存在の復活がやってきます。この悔改めの後では、聖霊がキリストに臨んできます。悔改めのバプテスマ、水のバプテスマの後に、「霊のバプテスマ」が――いや「後に」ではなくて――実にそれ自身が切っても切れない関係において、キリストにとっては水のバプテスマは直ちに霊のバプテスマに転ずる。

悔改めは直ちに新生となる。死が即ち生となる。「内的な死」です。己を全部投入したことは内的な死ですから。キリストが内的な死をそこで自らなさったならば、聖霊における「内的な生」が来た。キリストの十字架は全存在の、「内外相即の死」です。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

という驚くべき死です。しかしながら、それは今度は、聖霊の内住どころでない、キリストにとっては全存在が即ち霊体として復活した。これではっきりする。ヨルダンの洗礼というものは

「十字架・復活」

の徴なんです。「十字架・復活」への驚くべき徴が現れた。だから、これをもって貫いているところの全キリストというものは、常に己を死に渡しつつ、キリストは常に神の生を現じていた。「ヨルダンからゴルゴタ」というものは、

「ヨルダン即ゴルゴタ」

という相（すがた）で、ゴルゴタにおいて極まり、そして、その間がすべてキリストにとっては、常に己を渡して神に生きることであった。

「汝の聖意（みこころ）を成させ給え」

とは即ちキリストの実存の基調である。「汝の聖意を成させ給え」という祈りが即ちバプテスマの祈りです。だから、私たちにとっては、バプテスマというのは何か特別なことでも何でもない。バプテスマは、私たちが毎日バプテスマされなければ、本当にバプテスマされて生きていかない。「死へのバプテスマ」を受けなければ、「生へのバプテスマ」は受けない。キリストの中へと死へのバプテスマを受けるから、私たちはいよいよキリストの中へと生へのバプテスマ受けつつ進んでいく。

●死生の転換

パウロがローマ書6章で言っている。

「1**されば何をか言わん、恩恵の増さんがために罪のうちに止(とど)まるべきか、**
2**決して然らず、罪に就きて死にたる我らは争(いか)で尚その中に生きんや。**3**なんじら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うキリスト・イエスの中へと**
バプテスマを受けたる我らは、その死に合う死の中へと
バプテスマを受けしを。4**我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦えらせられ給いしごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり。」（ロマ6・1～4）

「本当に死ぬ」ということは「本当に生きる」ためだ。いい加減な生半可の死に方では、生半可の生き方しかできないが、本当に死ねば本当に生きる。

「死生の転換」

ということです。今日は、皆さん、本当に死んでいただかなければ困る。そして、本当に生きていただかなければ。

「まぁ今日は少し、60％位で我慢してもらう」

なんて、そうではない。100％でなくては。

「それはちょっと困ったな」

なんて、ちょっとも困らない。

「でも…」と言って、自分を主張しているうちはダメです、死ななくては。

「でも、そんな私はダメだ」

と言って、その「私」に向かって「でも」と言うならいい。他に向かって「でも」と言っているうちはダメです。

「そんなに仰るけれども、でも、私はダメなんです」

なんて、ダメでお終いではそれこそ本当にダメですよ。

「私はダメだから、いよいよダメでないキリストに入って行きましょう」

というわけです。

キリストは神の子で素晴らしいのでありますが、キリストは洗礼のヨハネに、

「だけれど、私はお前からバプテスマを受けるよ」

と。この時、キリストは「だけれど」と仰った。

「だけれど、今は許せ。私は義しい事を為すのだ。お前からバプテスマを受ける」

と、「その靴の紐を解くことができない」と言ったヨハネにキリストは洗礼を受けられた。これは彼の霊魂が本当に神の前にぶっつぶれている霊魂だからです。キリストは神の霊を、

その生命を、その救を来たらさんとして、自分を塵ほども何者とは思わない。神一切である。キリストが神の前に平伏しているこの姿。

これは、皆さん、一晩瞑想してなお足りない。聖書はそうやって読みたい。もし、このマルコ伝1章の数節を一晩瞑想して読んだら、その晩に必ず聖霊が来ると、私は申し上げておきます。

私たちにはこのキリストの真似はできない。真似しようとしたってできない。

「バプテスマを本当に受けることができない、悔改のできないダメなこの私のために、そんなにまでしてイエスは自分を棄ててくださったか」

と、このイエスを本当に全存在をもって見るときに、イエスの神への「平伏し」が私たちの「恩恵」として受けとられる。私たちに対するイエスの恩恵の力、その実存の力というものが私たちを悔改めさせる。

破ることのできない、砕けることのできない私たちの中に、この恩恵の力が入ってくる。審判の力が入るのではない。

「お前はダメだ」

といって、キリストの審く力が入ってくるのではない。黙って自分で受けられたキリストの恩恵の力が、私たちの頑固な殻を破って入ってくる。

●十字架の恩恵

ヨルダンのバプテスマのキリストの姿は同時に、ゴルゴタの十字架の姿である。これを見なかったらヨルダンのバプテスマの姿が見えない。ヨルダンとゴルゴタを一緒に見てなければ。

「それは時間と空間の隔たりがあるから…」

なんて、科学的に考えているうちはダメです。ヨルダンが即ゴルゴタとなって、これを本当に受けとるときに、このヨルダンの悔改めは十字架の恩恵の力として私たちを悔改めしめる。

「はぁ、そうですか」

ではない。

「本当にそうだ！」

といって、あなた方が今受けとらなければ。「のちほど」ではない、「今」受けとらなければダメです。

これは恩恵の力として私たちの中に入ってくる。私たちはどんなに固くても、鉄のごとく固くても、これは破れる。私たち人間という、「自我」というやつを破るものは、この十字架の恩恵の他にない。十字架の恩恵の他に、私たちが破れ悔改めさせられるところの力は、天上天下東西古今、何処にもない。

このキリストのバプテスマをいい加減にとり扱っているうちは、

「それは難しい。そんな真似はできない」

なんて言っているうちはダメです。そこにおいて、私たちにかかってくる恩恵の力を受けとらなければ。受けとらなければではない、それは受けとらしめられる、迫ってくる。

聖書を読むとは、魂がそのような瞑想、祈りの境地において読むことです。頭で読んでいるうちは絶対に入ってこない。聖書は頭で読んで入ってくるような、そんな安っぽい本ではない。どんなに難しそうな立派な本でも頭で入りますが、聖書は頭で入らない。

聖書は万人に入ってくる。ただし、万人に入ってくるその入る角度は、霊魂から入ってくるんです。頭からは入ってこない。だから、私はいわゆる学問教的なキリスト教には、

「否！　そうではない」

と言う。解釈はいくらでもしなさい、立派な答案はいくらでも書きなさい。けれども、全存在をもって答案を書いているクリスチャンはまことに少ない。霊魂（たましひ）をもってこれを受けとっているクリスチャンは少ない。預言者も使徒たちもみなこれを霊魂をもって受けとっていた。

「パウロのこの言葉とあの言葉の概念はどういうように辻褄が合うか」

なんて、何を言っているか。そんなことではない。この霊魂の角度からみな一貫している。

●旧き我とキリストにおける我

パウロは、キリストのこの死へのバプテスマによって、我々が新しくなり、

「5**我らキリストに接がれて、その死の状（さま）にひとしくば、その復活にも等しかるべし。**

と、はっきり言っている。

6**我らは知る、われらの旧（ふる）き人、キリストと共に十字架につけられたるは、罪の体（からだ）ほろびて、此ののち罪に事（つか）えざらん為なるを。7そは死にし者は罪より脱（のが）るるなり。**」（ロマ6・5～7）

罪から私たちは根底的に死んでいる。十字架で死んでいるんだから。相変わらずダメな私はいくら後から、のそのそと半死半生のような姿をしていても、そうではない本当に死んでいる私がある。本当に死んでいる私が、十字架に死んでいる私がある。そうしたら、本当に復活のキリストを受けている私が同時にある。その死んでいる私は、キリストにおいて生きている私である。

だから、その他に、いい加減な息をしているような「旧い我」というものは、もはや問題にしなくていい。そんなものをいくら問題にしてたって、そんなものは生きっこないから。生きるのは、

「キリストにおける我」

だけなんです。これが生きて、段々成長していく。半死半生みたいなやつは段々排除されていく。

水で何か物を洗う時でも、そうではないですか。グワーッと新しい水が入ってくるから、旧いものはどんどん除けられていく。どんどん新しい生命が流れてくるから、知らない間に潔められてしまう。

潔めというものは、復活のキリストを受けとるという、このことを十字架の門を通ってやっていれば、それが私たちを、

「潔めより潔め へ、力より力へ、生命より生命へ、栄光より栄光へ」

と変えていく。これがバプテスマの相なんです。

ローマ書6章はそういう意味においてキリストにおけるバプテスマの事態として忘れてはいかん。そして、ヨルダンとゴルゴタを本当に一つに受けとらなければダメです。

●霊風火言

使徒行伝の2章に入ります。

2烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。

キリストにおいては、「聖霊が鴿のごとく降って」きた。預言者エリヤはやはり「火のごときもの」の方です。キリストももちろん火です、驚くべき火です。モーセもそうです。出エジプト記の3章を見ると、

「1モーセその妻の父なるミデアンの祭司エテロの群を牧いおりしが、その群を曠野の奥にみちびきて神の山ホレブに至るに、2エホバの使者棘の裏の火焔の中にて彼にあらわる。彼見るに棘火に燃ゆれどもその棘焼けず。3モーセいいけるは我ゆきてこの大なる観を見、何故に棘の燃えたえざるかを見ん。4エホバ彼がきたり観んとするを見たもう。即ち神棘の中よりモーセよモーセよと彼を呼びたまいければ、我ここにありというに、5神いいたまいけるは、此に近よるなかれ汝の足より履を脱ぐべし。汝が立つ処は聖き地なればなり。6又いいたまいけるは我はなんじの父の神アブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりと。モーセ神を見ることを畏れてその面を蔽せり。」（出エジプト3・1～6）

「火」の現象に「言」が現れた。先程のエゼキエルもそうです。「風」と「火」です。霊・風・火・言。ギリシア語でもヘブライ語でも、「霊」という字と「風」という字は同じ字です。「ルーアッハ」「プニューマ」という。このペンテコステの時に「霊風」が吹いてきた。

「火の如きもの舌のように現れ」

とある。「舌」は「言」を発するものです。霊風・火言（かげん）という。一体、何の霊風であり、何の火言か。キリストの霊の風である。ここに「キリストの」とは書いてないけれども、皆さん、そこに「キリストの」と付け加えなければダメです。キリストの霊風がやってきた。また、キリストの火言が臨んできた。霊風火言は霊であり言であり、風であり火である。

「我が言（ことば）は霊なり生命（いのち）なり」

という霊言です。この霊風火言というものは一つの事態の別な現れに過ぎない。それはキリストのみ霊であり、キリストの言なんです。

3 **また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人（おのおの）のうえに止まる。**

分かれて一人ひとりの上に止まった。みんなの上に止まる。源（みなもと）は一つです。源は一つで、これは限りなく分割される。分割されながら、これは全的にすべて百％にくる。霊の現象は、霊の事態はそのような不思議なことです。決して力がそがれているのではない。太陽は一つだけれども、皆さんにみな等しく光がきている。そのようにして霊風火言が、キリストの霊、キリストの言が、彼らに臨んできた。

それは、彼らが四十日間の幾日も、またそれから後の十日間というものを特に祈り、都に留まって祈り待っていた。この祈りに応えて、来られた。祈りの場に臨んで来られた。私たちが聖書を受けとる時に、どうしてもはずすことのできない場は何かというと、この「祈りの場」です。祈り心地でないところには、聖書の言は化体（かたい）してこない。

今、何故、一般にキリスト教はダメであるかというと、それは祈りが不足しているからです。祈りは、ただ時間的に長いことが祈りではない。

「口先で頭で祈っているか。「質的に本当に自分を投ずる角度で祈っているか、霊魂を神の前に本当に投じて祈っているか」

ということです。

ルカ伝に、

「キリストがバプテスマを受けて祈って水から上がられたら、聖霊が臨んで来た」

と書いてある。即ち、もちろんイエス・キリストは神の前に全托し投入して祈られた。これは霊魂の祈りの姿の最も深い形です。使徒たちも本当にそのように注ぎだしていたから、聖霊が彼らに臨んできた。

皆さんはこうやって、聖書を聞いています。私はこうやって語っています。その聞きまた語っている事態において、霊魂が本当に聖書の事態に開いているならば、それが即ち祈りの態勢なんです。皆さんの中にみ霊の恩寵はもう、目には見えないけれども、来ているんです。この恩恵の力は皆さんの中に来ている。幼児（おさなご）のごとき霊魂をもって、これを聞き受けとっている人にはグングン入ってくる。

●高次な霊言

4彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣(の)べしむるままに異邦(ことくに)の言にて語りはじむ。

「グローサ」という字ですが、「異言」で語った。今まで自分が経験しなかったような言葉で語りはじめた。これはこの場合「異邦の言」ととることもできます。その異言が異国の言葉を語っていたから。英語やヘブライ語やギリシア語を自分は理性では知らない。ところが、キリストの御霊、キリストの霊風と火言が入ってきたら、その口を通して語らせられる。即ち、キリストの御霊はそこに並み居るところのいろいろな地方から来ている人たちに分かるように、キリストがこの言葉を語らしめる。彼らはその道具となって、口が動くという始末です。これは御霊によって彼らがそのように完全に導かれているからです。こういう現象は滅多に起きる現象ではない。このペンテコステにおいては、これが起きた。特に素晴らしい選びの器において、このような事が起きた。

私たちは、

「そういった異言が語れるか語れないか」

ということではない。御霊が臨むときには、神さまがその時に本当にその人において必要となさる事をなさるのであって、何か摩訶不思議を人に見せびらかすためには絶対になさらない。ですから、この場合は、キリストの福音が本当にその地方の人たちに広まるために、絶対にのっぴきならない事態となって、このようなことが起きた。

5時に敬虔(けいけん)なるユダヤ人ら天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、6この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己(くに)が国語(くにことば)にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合い、7かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、8如何にして、我等おのおのの生まれし国の言をきくか、

ガリラヤの田舎の人たちで、アラミ語しか知らない。それがなぜこんなに方々の国々の言葉をこうやって語って、異口異音に語っているのか。それはとにかく尋常ならぬ様ですから、驚きあやしんだわけです。

9我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、10フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人――ユダヤ人および改宗者――11クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語(くにことば)にて彼らが神の大なる御業をかたるを聞かんとは』

小アジヤ、メソポタミヤ地方、ギリシヤ、エジプトという地中海の西東北南のご連中がここに来ているわけです。それがみな自分たちの国語で聞いたというのですから、驚くべきことです。それが同時にいろいろな言葉でそれぞれに語られたから、ある一つの騒音のご

とく響いたでしょう。だから、

12 **みな驚き、惑いて互に言う『これ何事ぞ』13 或者どもは嘲りて言う『かれらは甘き葡萄酒にて満たされたり』**

と言って嘲った者たちがいた。ここのところは記事がどうもはっきりしない。

「『葡萄酒にて満たされたり』というのはいわゆる異言で、意味をなさない異言を言っていたのだろう。だから、彼らがそういって嘲ったのだろう。けれども、前の方にはちゃんと、『我が国語（くにことば）にて彼らが神の大なる御業をかたる』と書いてある。ここの記事は矛盾するのではないか」

なんて、学者はなんのかんのと言う。

私は思うに、これは同時にいろいろな言葉が、非常に高次な霊言をもって語られていて、その中にはいわゆる異言というものも交じっているでしょう。異言の段階にいろいろありますから、高次なものはそうやってはっきりと分かるように語っている。また、分からないのもその中に交じってもいたでしょう。だから、こういうようなことを言ったので、決して全体が、いわゆる分からない異言――はむしろ少なかったのであって、ちゃんと意味をなしているところの意味のなさない異言――パウロがコリント前書12章、14章で言っているところの高次な異言というものが主導的なものであったと私は思う。

「今の英語のように、当時は共通のギリシア語をしゃべっていたから、皆に分かったんだろう」

なんていう解釈をする人もあるが、そうではない。それだったなら、「甘き葡萄酒云々」なんて嘲ることはないはずです。

●能力ある業と不思議と徴

14 **ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣べて言う『ユダヤの人々および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ、15 今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、16 これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。17「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子（むすこ）女（むすめ）は預言し、汝らの若者は幻影（まぼろし）を見、なんじらの老人は夢を見るべし。18 その世に至りて、わが僕・婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。19 われ上は天に不思議を、下は地に徴を現さん、即ち血と火と煙の気とあるべし。20 主の大なる顕著（いちじる）しき日のきたる前に、日は闇に月は血に変らん。**

最後の終末の時、すべて天然の驚くべき異象です。

21 すべて主の御名を呼び頼む者は救われん』22 イスラエルの人々よ、これらの言を聴け。ナザレのイエスは、汝らの知るごとく、神かれによりて汝らの中

に行い給いし能力ある業と不思議と徴とをもて汝らに証し給える人なり。
23この人は神の定め給いし御旨と、預じめ知り給う所とによりて付されしが、
汝ら不法の人の手をもて釘碟にして殺せり。24然れど神は死の苦難を解きて
之を甦えらせ給えり。彼は死に繋がれおるべき者ならざりしなり。

ペテロは、

「キリストがいかに力ある業と不思議と徴をもって汝らに神の国を現したか」

ということを言っている。この神の国はいかに本当の生命を与えるものであるか。また、本当の言を与えるものであるか。神の霊だけが本当の生命を持っている。神の言だけが本当の真理を持っている。

いろいろなものが生命を持っている。私たちも生命を持っている。私たちは誰でも死にたくない。一年でも二年でも余計生きたいと思う。誰でも死は望まない。それほど、生命というものは人間にとって、いや生きとし生けるものの本能です。生きるということは本能的欲求です。

私たちの朽ちゆく生命も神の恩寵の下には在るけれども、それが本当に神の恩寵を受けとることをしないから、残念ながら亡びていく。そのままにしておいたならば、その霊魂もその心もその体もみな亡びていく。生きるという望みをもちながら滅びていく。

そんなに生きたいならば、

「なぜ、本当の生命であるところのものに全存在を預けないか。全存在をそれに向かって開けないか」

生きようとして自分だけを守ろうとするところに、人間の生命の衝動は悪くなくても、そういう衝動そのものが己を支配するところに、人間の根本的な「罪」というものがある。

「神さまの生命が、神の聖らかな死なない本当の生命をもって生かさんとしている」

のが、ヤコブ書の、

「神は我らの衷に住ませ給いし霊を、妬むほどに慕いたもう」（ヤコブ４・５）

という言葉です。即ち、私たちの生命の中心は「霊」なんです。どんな唯物論者だってみな霊がある。その霊は誰もつかみ出すことができない。意識のもっと奥の世界だから。いわゆる五感――五感の他に「第六感」なんていいますけれども――六感という、思考するというような感覚よりももっと奥の世界の、絶対的な感覚の、無意識の、意識の奥の世界に「霊」というのがある。これが実は、知らない間に、私たちを統括しているのだけれども、それが本当に覚めていない。そして、自己を主張するような囚われの中に入っている。

私たちは何に囚われているか。今の若い人たちが「自由、自由」と言うけれども、一番「自分」というものに囚われていることを知らない。自分で自由だと思っているけれども、実は自分というものに囚われている。「自分」というもの、「自己」というものが一番の曲者なんです。これが自分を自縛している。自縛してるくせに、自由と言っている。これは喜劇みたいな

ものです、神さまの目から見たら。まことに、戯画（カリカチュア）です。

この自縄自縛に陥っている自己というものを「生命、生命」と言っているけれども、それは本当の生命ではない。

●キリストの霊生

「3**イエス答えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わず』**」（ヨハネ3・3）

と、キリストがニコデモに言われた通り、

「それではダメだよ」

と、どんなにその生命を延ばそうとしたって、これは高が知れているので、終いにはくたびれてしまう。そうではない。その生命の中に本当に新たな「新生」が入ってきて、

「天から生まれなければ」

「新たに」とは

「上から、霊界から」

ということで、自然科学的空間ではない。

「霊界から、天界から新たに来るところの生命をもって生まれなければ」

ということです。

そういう神の霊というものを受けとったならば、私たちは本当に

「霊生」

霊の生となる。本当に「生ける者」というのは、私たちがこの霊生となることです。キリストの霊生です、自分の霊生ではない。

「神・キリストの霊生」

となるときに、初めて私たちは

「永遠の生命」

ヨハネ伝でいうところの「永遠の生命」体、他の福音書でいうところの

「天国、天国体」

となる。私たちが「天国」というのは、キリストの霊生の時にはじめて、私たちは自己という自縄自縛から解放されますから、本当に自由なんです。

その生命は本当の力を持っている。「能力ある業と不思議と徴」がなぜキリストを通して現れたか。それは彼は本当の生命であるからです。普通のいい加減な生命においては、この「能力ある業と不思議と徴」は現れない。いわゆる観念信仰においてはこれは現れない。ところが、キリストを本当に受けとっている者にはこれが現れる。

私たちはそれを説明しなくていい。存在をもって、生活をもって身証（あかし）することです。存在が即ち証言となる。本当に聖書を身で読む人は存在をもって証言する人です。

「能力ある業と不思議と徴」

は、キリストの永遠の生命と真理の、能力ある業、不思議、徴であって、いわゆる摩訶不思議ではない。魔的な霊的なものがある。そういうものがやることとは質が違うから、これは間違えないように。

私たちはその「能力ある業と不思議と徴」というものを私たちの存在の根源において、キリストのそういったものを根源現象としてこれを本当に受けとるということが、本当の信じ交わる、「信交」なんです。

「私はダメですが、しかし、私の中にはキリストの生命があります」

と、皆さん、本当に言えなければダメです。それは根源現象が来ていれば言えます、キリストの生命がきていれば。

私は自分の信仰なんか当てにしません。けれども、キリストの生命が、キリストのこのバプテスマ、十字架、復活の彼の全実存が私に恩寵として迫ってきて、私をひっくり返したから仕方がない。私は十字架に付けられてある自分に気が付いたから仕方がない。復活しているキリストの生命が私を生き生きとさせるから仕方がない。

「止(や)むを得ざるなり。福音は黙(もだ)そうとしても黙すことができない」

とパウロが言った。

「エホバの霊言、火の如くわが中に燃え、火の燃ゆるが如くなれば、忍ぶに疲れて耐えがたし」

と言ったエレミヤのように。

「49我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂(と)げらるるまでは思い逼(せま)ること如何(いかばかり)許ぞや」（ルカ12・49～50）

とキリストは言われた。「火」とは聖霊の火であり、真理の火です。キリストは「受くべきバプテスマ」即ち十字架を受けとった。

●キリストのヨルダンの聖霊降臨

キリストのバプテスマは、ヨルダンのバプテスマとゴルゴタのバプテスマは、即ち私たちへのバプテスマの保証である、恩恵である。私たちは、バプテスマは受けるも受けないもない。ヨルダンとゴルゴタにおいて、既に私たちはバプテスマを恩寵として受けとった。

使徒行伝2章の聖霊の降臨の大先駆をなしているものはキリストのヨルダンにおける聖霊の降臨です。イエス・キリストのヨルダンの聖霊降臨、ヨルダンのペンテコステは最も素晴らしい。ヨルダンにおける聖霊降臨は使徒行伝2章の先駆であり、それの土台ですから。

それで初めて私たちにバプテスマというものがはっきりした。即ち、私たちはキリストを、このヨルダンとゴルゴタを本当に恩寵として、

「然り！」
と言って無条件に受けとる。
「こっちの信仰がどうだこうだ」
ではない。キリストは事実をもって、私たちの代わりに、ヨルダンに入ったのではないですか。　私たちの代わりに、十字架に上ったのではないですか。そうしたら、これを受けるも受けないもないではないですか。
「これを本当にお前たちは受けなさい。お前たちは悔改ができないから、私がヨルダンに入ったのではないか。罪から逃れられないから、自縄自縛だから、私が十字架に架かったのではないか」
というのが、キリストの、言葉ではなくして行為をもってするところの、行をもってするところの宣言であります。ヨルダンの言、十字架の言というのはそれです。
皆さん、これを聞いて豁然として、
「ああ！　私はバプテスマを既に受けた」
と、今、言えなければダメです。
この使徒行伝第２章は難しくも何でもない。私たちの中に、この十字架――ヨルダンとゴルゴタ――を受けとったときに、この使徒行伝第２章は今、現に皆さんの中に根源現象としてやって来ている。根源現象としてやって来ているのだから、「自分はどうのこうの」なんて、何を見てるか。ただ、キリストだけである。
これを本当に皆さんが受けとって、
「大死一番」
できているから、私たちは「大生一番」する。本当に生きていく。福音書や使徒行伝において、キリストや使徒たちが本当に神の表現体となって、神の証をその言と行為をもってどしどししていっているということを――聖書は、福音の事態は本当にこうであるということを――文字通り受けとって行くことでなければダメです。
もはや、
「神癒がどうの」
なんて現象を問題にしない。神癒も起きます。何でも起きます。目の見えない方がありますが、見えるようになります。キリストの根源現象を受けとると、みなキリストに在って健やかな者なんです。みな、キリストに在って霊の目を持っている者なんです。私たちの肉の眼や、肉の体が破れていても結構です。しかしながら、私たちの霊の眼がこの中から本当の生命を発するから。キリストが必要とするならば、その眼は必ず開けられる。
皆さん、
「自分はもうこれ位でいい」
なんてことを絶対にタカをくくってはいかん。キリストの恩寵をどこまでも根源的に受け

とって、端的に願いを願ってください。

「祈りたることは既に聴かれたりとせよ」

とは、

「祈りたることは根源において聴かれたりとせよ。然らば、必ず展開していくぞ」

ということです。

「根源において聴かれた」

ということを本当に受けとってないから、私たちがダメなんです。けれども、本当に受けとっていくならば、何も恐いことはない。私たちはそのようにしている。

なぜ理性をもって、神の恩寵の世界を、神の霊の世界を、神の智慧の世界を限定するか。それこそ本当の不信という。キリスト教の本当の前進ができないのは、私たちがいわゆる文化的な頭をもってこれを阻止しているから、とんでもない話です。私たちの理性も悟性も感情も一切のものは、この現象の驚くべき能力と智慧と生命と真理と光と愛とをもって、これが展開されていく。どうか、皆さん、その証人（あかしびと）となってください。私たちがそれにならないならば、もはや

「聖書、聖書」

なんていう言うことは止めた方がいい。聖書の方でお断りしますよ。

「そんなものは聖書ではない」

と聖書が言ってます。

「我は生命のパンなり、我を食らえ」

「然り！　キリストを食らいます」

と。この意味において、私たちは洗礼と聖餐がまた一つになる。形式や儀式はあってもなくても、どちらでもいい。しかしながら、形をして本当に内側から生かしているならば、洗礼・聖餐も結構です。洗礼・聖餐そのものが「どうである、こうである」ではない。問題は、

「本当に霊の聖餐を受けているか、霊の洗礼を受けているか」

ということにある。しからば、形はあっても無くてもどちらでもよろしい。無いことをもって誇りとして、実は霊の洗礼も聖餐も受けてないようなクリスチャンは偽善者です。

●現象の奥の根源に連なる

この20世紀後半において、聖書が私たち人類の新しき言として真理として、私たちクリスチャンがこれを生きて証しするのでなかったならば、人類はどうなるか。「石が叫ぶ」時が来る。それはもはやおしまいです。「戦争の、平和の」ではない。問題は、

「私たちが本当に開け放たれるか」

ということです。ペテロが使徒行伝2章の終りの方で言っている。

25ダビデ彼につきて言う「われ常に我が前に主を見たり、我が動かされぬ為に我が右に在(いま)せばなり。26この故に我が心は楽しみ、我が舌は喜べり、且わが肉体もまた望の中に宿らん。27汝わが霊魂を黄泉(よみ)に棄て置かず、汝の聖者の朽果つることを許し給わざればなり。28汝は生命の道を我に示し給えり、御顔の前にて我に歓喜を満たし給わん」29兄弟たちよ、先祖ダビデに就きて、我ははばからず汝らに言うを得べし、彼は死にて葬られ、其の墓は今日に至るまで我らの中にあり。30即ち彼は預言者にして、己の身より出づる者をおのれの座位に坐せしむることを、誓をもて神の約し給いしを知り、31先見して、キリストの復活に就きて語り、その黄泉(よみ)に棄て置かれず、その肉体の朽ち果てぬことを言えるなり。32神はこのイエスを甦えらせ給えり、我らは皆その証人なり。

使徒たちも皆始めは躓いた。キリストがあんなに預言されたのに、キリストが甦えることを受けとっていない。ヨルダンで何のために洗礼を受けられたか、どうしてキリストはあのように御霊を受けられたか、使徒たちも皆分かっていない。けれども、復活のキリストに出合ってやっと目が覚めた。霧が逆に晴れてきた。

33イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて汝らの見聞する此のものを注ぎ給いしなり。

だから、あのように驚くべき事態に入ったのは、この約束の聖霊が今みんなに臨んできたからなのだと。

観念の人たちはよく、

「『十字架、十字架』と言ってもいかん。『復活、復活』と言ってもいかん。『聖霊、聖霊』と言ってもいかん。これらを丁度いいバランスをもって言わなくてはいかん」

と言う。それはそうですよ。けれども、そんなことを説明したってダメなんです。

私は十字架を言うときには、徹底的に十字架を言います、パウロがコリント前書2章で徹底的に十字架のことを言ったように。また、コリント前書15章で徹底的に復活のキリストを叫び、コリント前書13章で愛のことを徹底的に言ったように。十字架と復活と聖霊というものは切っても切ることができないから、楽に言える。それが楽に言えるようになるまではダメです。

「私は十字架のことを言ってると、こちらがおろそかになりそうだ」

なんてではダメです。十字架のことを徹底的に言うときには、既にその背後には復活と聖霊があるから言える。復活のことが徹底的に言えるのは、十字架と聖霊のことがあるから言える。聖霊を徹底的に言えるのは、十字架と復活を経ているから、言えるんです。その根源構造がはっきり自分の中で生きているならば、何を言ったって、それが決して偏することはない。渾然一体であるところの全一体とならなければダメです。そうしたら、どう

いう現象が起きても現象にとらわれない。現象の奥の根源に連なっているのだから。

ひとつの花を無心になって描く画家は全存在がそこに集中される。勉強する時に、ある頁に無心になって勉強する時には、その全存在がそこにかかっている。決して分裂してない。私たちはそのように決して偏することを心配しないところの構造に入っていくから、それが本当にキリストを受けているということになる。事実、この復活の生命というものが、御霊において来るのだから仕方がない。事実が証明する。

皆さん、そういうようになって来たら本当に楽になる。妙な心配は要らん。ひとつの現象のために、現象に決してとらわれることがない。現象において本体につき抜けていく。

●名を呼ぶと一つになる

34 **それダビデは天に昇りしことなし、然れど自ら言う『主わが主に言い給う、**
35 **我なんじの敵を汝の足台となすまでは我が右に坐せよ」と。**36 **然ればイスラエルの全家は知るべきなり。汝らが十字架に釘けし此のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給えり』**

ペテロは本当に渾身の魂をこめてこれらのことを証言しました。うわの空で読んだらダメです。ペテロの一言一言に本当に力がかかっている。

「イエスを立てて主となしキリストとなし給えり」

とあったら、「ああ、そうですか」ではない。

「私にとってイエスは主であり、私にとってイエスはキリストである」

ということです。

37 **人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』**38 **ペテロ答う『なんじら悔改めて、おのおの罪の赦しを得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。**

「バプテスマを受ける」ということが決して形式ではない。「キリスト」という名は、全キリストが――アブラハム・イサクよりも前に在ったキリスト、世の末に再び来たり給うというキリストが――即ち「キリストの名」という言葉の中にこもっている。実名であって空名ではない。

私が「M君」と呼ぶときに、M君という全存在がそこに浮いてくる。武士は名を尊ぶと言う。昔の武士は実存的ですから、名を尊ぶ。虚名は尊ばない。実名を尊ぶ。名において全実存がかかっているから、名を尊ぶ。皆さん一人一人は、キリストにその名をもって呼ばれている。

キリストは神さまのことをその名において呼んだ。「父よ」と呼んでいる。キリストにとって、神は「父」という名であった。キリストは「神よ」とはあまり言われなかった。むしろ、「父」というように呼ばれたことが福音書をみると多い。

「父よ！　お父さん！」

と。これは本当のお父さんです。キリストにとっては、生命を本当に自分に分かっているところの父なんです。キリストは私たちとっては、

「主（しゅ）、「救主（すくいぬし）、贖主（あがないぬし）」

です。キリストが神に向かって「父よ！」と言われたように、私たちはキリストに向かって、

「主よ！」

です。我は神の僕であるときに、本当に自由であり、本当に神の子とされる。

「アバ、父よ！」

と叫ぶ。神を「父」と叫び、キリストを「主」と呼ぶことを、全存在をもってこれを呼ぶときに、私たちは即ち父の中に、主の中にすっかり入れられる。一つになっていなければ呼べない。また、本当に呼ぶことによって一つになる。

●聖霊の賜物

38ペテロ答う『**なんじら悔改めて、おのおの罪の赦しを得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。**

「汝ら悔改めて」とは、どこで悔改めるか。十字架で悔改める。手放しで悔改めたってダメです。私たちがいくら手放しで悔改めたって、そんなものはダメです。十字架において悔改めるんです。即ち、十字架は私たちへの悔改めの土台なんだから、ここにおいて私たちは本当に方向転換させられる。「悔改め」「メタノイア」というのは、神に向かって方向転換をして、自縄自縛から放たれることです。だから、

「なんじら十字架において悔改めて、おのおの罪の赦しを得んためにイエス・キリストの名に於いて全存在でバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん」

ということです。私たちが聖霊において、十字架において本当に悔改めをすることがバプテスマなんです。これが即ち、

「我が受くべきバプテスマあり」

と言われたキリストのバプテスマであった。そこにおいて、私たちが、罪の許し――「我という罪」からの許しです、罪というのは「この罪、かの罪」ではない――我という罪からの許しを得て、バプテスマを受けてみよ、然らば、聖霊の賜物を受けんと。聖霊及びその賜物を受ける。

その人その人によって賜物はいろいろです。どれでもいい。神さまがくださる賜物は、幾種類でもいい、一つでも構わない。遠慮なく戴くんです。これは、戴いたって、私したらダメです。聖霊の賜物というものはどこまでもキリストの属（もの）、神の属ですから。神の所有（もの）としていただく。「自分はこういう賜物がある」なんて誇ったら、それはどこかへ逃げて行ってしまう。

39この約束は汝らと汝らの子らと凡ての遠き者、即ち主なる我らの神の召し給う者とに属くなり』40この他なお多くの言をもて証し、かつ勧めて『この曲れる代より救い出されよ』と言えり。41斯てペテロの言を聴き納れし者はバプテスマを受く。この日、弟子に加わりたる者、おおよそ三千人なり。42彼らは使徒たちの教えを受け、交際をなし、パンを擘き祈祷をなすことを只管つとむ。

この後の実存が大事です。

43ここに人みな敬畏を生じ、多くの不思議と徴とは使徒たちに由りて行われたり。44信じたる者はみな偕に居りて諸般の物を共にし、45資産と所有とを売り各人の用に従いて分け与え、46日々、心を一つにして弛みなく宮に居り、家にてパンをさき、歓喜と真心とをもて食事をなし、47神を讃美して一般の民に悦ばる。斯て主は救わるる者を日々かれらの中に加え給えり。

本当の意味において、財産は私有であって共有である。私有にして共有である。私有、共有、神有である。本当に神の有とならなければ、私有も共有も意味をなさない。我々の持っているものはみな神の所有、「神有」である。この神有において初めて私有が善用され、また共有となる。

「私は聖書の福音が分かりました」

なんて、そんなことを言っているのではない。私たちは限りなく無となって、限りなく聖書にとらわれ、限りなく聖書の中に入っていく。それだけの話です。限りなくバプテスマされ、限りなくこの生命のバプテスマを、御霊のバプテスマを受けていく。

●愛の生命の霊

コリント前書10章をみると、

「1兄弟よ、我なんじらが之を知らぬを好まず。即ち我らの先祖はみな雲の下にあり、みな海をとおり、2みな雲と海とにてバプテスマを受けてモーセにつけり。3而して皆おなじく霊なる食物を食し、4みな同じく霊なる飲物を飲めり。これ彼らに随いし霊なる岩より飲みたるなり、その岩は即ちキリストなりき。」（コリント前10・1～4）

という不思議な言葉がある。この旧約のモーセの事態も、彼らが出エジプトしたのも、ヨシュアがヨルダンの河を渡っていったのも、みな、パウロにとってはバプテスマの事態です。本当にそのバプテスマを受けると、同時に、霊なる飲物を飲み、霊なる食物を食べる。これは即ちキリストである。即ち、キリストの生命がそこに隠れていた。

イエス・キリストは、現れる前になお、イスラエルの歴史を通して、いろいろな事態を通して、恩寵を生命を現しておられた。旧約・新約を貫いて――もちろんキリストが頂点

ですが――預言者・使徒たちが真にバプテスマを受け、また真に洗礼と聖餐を受けつつ来た。なるほど、プロテスタントにおいてマルチン・ルターが洗礼と聖餐だけは残した意味は、本当の霊的意味はそこに在る。

洗礼と聖餐は、要するに、キリストの血によって洗礼され、キリストの血を飲むことによって聖餐する。キリストによって洗われ、キリストによって生きる。キリストの血によって洗われ、キリストの血を飲む。キリストの血を生命とする。「血」とは即ち「霊の生命（いのち）」のことを言う。霊によって潔められ、霊によって恵福（さいわい）せられ祝福せられ力づけられる。その霊は即ち愛の霊、生命の霊です。愛の霊ですから。

キリストの洗礼、バプテスマということの本当の質はいずこにあるか。先程の「霊風火言」の本当の質はいずかにあるか。私たちを愛の生命に展開していく。キリストの愛がかくのごとき驚くべき霊言となり、霊風となって現れてきた。私たちは、キリストの神の愛というものはどれほど素晴らしい霊的なものであるかということに新しく気が付いた。そして、私たちが生きるとは、どんなことがあってもこの愛の生命を突っ走り、いかなる者も荷ない上げていくような驚くべき愛の生命というものは、全く霊的なものであるということが分かった。

私たちは聖言によるところのバプテスマを受けた。私たちはただ聖言を、聖書を学んだのではない。聖書の言葉によってバプテスマされた。それが即ち聖書に現れているところのキリストの霊の光をもって、今日、この聖書の言葉を読むから、この言葉によって私たちはバプテスマされる。これは本当の聖書の読み方であり、受けとり方であると思います。

皆さん、いずこにおいても、たとえ一人になっても大丈夫です。この聖書一巻において、その背後から迫るところのキリストの霊風、キリストの火言が、あなた方を驚くべき愛の生命の、本当の智慧の、本当の能力の世界に展開して止まない。

どうか、その意味においてキリストの証人となってください。私たちはなっていきます。これを本当の「殉道」という。かくのごとき生き方を本当に道に殉ずるという。それはキリストという道に生きる者である。

これで、私たちはこのペンテコステの集会をキリストの聖霊の生命の言の勝利として終ります。

●祈り

祈ります。我らの贖い主キリストのお父さま。この兄弟姉妹たちは今、霊魂をみ前に注ぎ出して、

「もはや我もなく世もなく、ただ主のみいませり」

と、讃美歌にあるとおりです。主イエス・キリストのご恩寵がこの小さな幕屋に降り、聖霊の光が燦々として太陽の光よりも素晴らしく注ぎ給いしご恩寵を感謝いたします。主イ

エス・キリストの聖霊の生命がそれぞれの中に今、分かれ入り、そして一体とされていることを感謝いたします。

目の見えない姉妹たち、兄弟たちは決して悲観することはありません。主イエス・キリストのご恩寵は限りなく開示され、喜びより喜びへの霊魂となり、その内的心眼は開かれ、やがてあなたは善き事をなし給うことを信じます。本当に信ずるとならば、私たちは徹底的にあなたの聖言を信じ、キリストが福音書においてあなたのご栄光を現し給いましたように、また、使徒たちが使徒行伝において現しましたように、いよいよ、私たちこの土の器において、あなたのご恩恵が現れ給わんことを切に願い奉ります。

お父さま、何も水を割ることなく、端的に全存在を投じまた投じ、霊魂を投じ、全行為を投じ、一切を投げうって進ましめてください。驚くべきことがこのひとたちの間から発していきます。あなたは決して制限される恩寵なんかをくださったのではありません。驚くべきことが起きていきます。

どうか、徹底的にキリストを受けとり、キリストの全能を信じて、進ましめ給わんことを切に願い奉ります。勝利また勝利、栄光より栄光へと進ましめ給わんことを願い奉ります。

かくして、一日また一日、

「今日も次の日も我は進み行かざるを得ず」

というキリストと共に、進みまた進んでいきます。

神さま、どうか、このようにして、この全世界が本当にキリストの国を現ずるように。日本の救はただこの一点にかかることを真に胆に銘じ、全存在をもって身証せしめ給わんことを願い奉ります。心からの感謝と願い、御名により献げ奉ります。アーメン。